

福島智・東京大学先端科学技術研究センター助教授

9歳で失明、18歳で失聴され、ご苦労されたでしょうね

目が見えない上に耳まで聞こえなくなり、まるで宇宙空間に放り出されたみたいでした。そんな時、母がふと思いついて点字を私の手に打ったのをきっかけにこの「指点字」という会話法を開発しました。どん底のときは生きる力が削り取られましたが、コミュニケーションが回復して生きる意欲もよみがえりました。

尊厳ある人間らしい生活とは

社会保障審議会障害部会で自立とは何か議論になった時、私は「財布と相談して自分の好きなものを食べることだ」と言いました。自分で作るか、誰かに作ってもらうか、店屋物を取るか、外食するか、それも含め自分が決められるかです。自分の好きな時間に寝て起きることも重要です。こうした生きる上での基本的な自由が保障されていない人が、障害者や高齢者の中に少なからずいると思います。

現在の福祉の流れは尊厳ある人間らしい生活を可能にするでしょうか。

地域生活に向かうのも措置から契約に移ったのも良い流れですが、万々歳とは言えません。契約とは責任の重いことで、本人と事業者とで契約するとなると、自己選択できる点は良いですが、国や自治体の責任が見えにくくなり、問題が起こっても自己責任で片付けられてしまいかねません。

福祉制度をめぐる議論は、本来まずニーズがあり、それを満たす制度を工夫し、その制度を支える財源を確保するという順番でなされるべきだと思うのですが、現状はまず財源論ありきで順序が逆転しています。

利用の拡大が悪いことだったのでしょか。これまでニーズが押し込まれていただけです。本人が我慢していたか、家族が無償の労働で犠牲になっていたのです。あらかじめ立てた予算に対する財源不足でしかなく、ニーズに合ったサービスがなされた結果なら、それがちょうど良いということですが。

障害者福祉施策改革のグランドデザイン案について

障害者と高齢者を区別せず支援しようという理念は将来を展望する上で大事ですし、個別給付を義務的経費にすると明記されている点も評価できますが、応益負担の導入は避けるべきです。

特別扱いはおかしいと思いますが、現実には国民すべてが生存に不可欠な資源や自由が保障され、安全・安心に暮らせる社会になってはいません。差別的な仕組みを温存する一方で、負担だけ平等にするのは一貫性に欠けます。

重度障害者の多くが、いわば個人レベルでの「安全保障」が脅かされています。トイレや風呂、食事などの日常生活の支援が命に直結するからです。また、例え物理的に生きられたとしても、コミュニケーションや自由な外出が保障されなければ、人間の魂は生きる力失ってしまいます。